

42056

教科書文庫

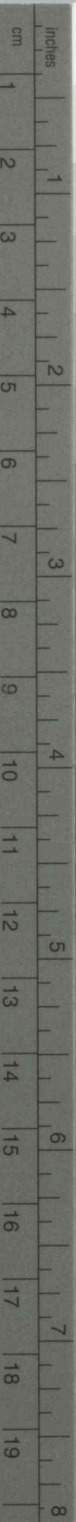
4
810
41-1937
20000 66955

Kodak Gray Scale



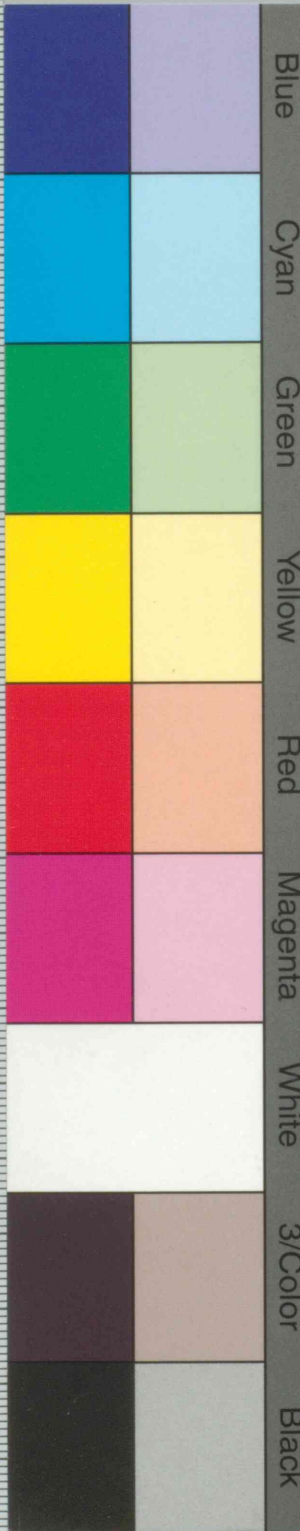
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
昭12

中等日本文学史





資料室

濟定檢省部文

用科文漢語國校學中日一十月二十年二十和昭  
用科語國校學女等高日一十月二十年二十和昭

4a  
810  
BB12

廣島文理科大学教授

鈴木敏也著

中等日本文學史

東京中文館藏版





## 凡 例

- 一、本書は日本文學の歴史的發展を最も簡明に敘述したもので、中等學校の文學史教科書を目標として編纂したものです。
- 二、その程度は、教養ある國民が常識として知つて居なければならぬ、と思はれる範圍内に留めておきました。
- 三、日本文學の上に現はれた重要な姿相は、すべて攝り入れてありますが、著作と作家とが、從來のこの程度のものに比べて、少しく出てゐるかと思ひます。
- 四、けれども、將來國民の中堅たるべき人々にとつて、この位の事は是非とも知つて居る必要があると信じます。
- 五、作品の姿である文歌句等の類例は、讀本の教材に譲つて、こゝには省略しました。



目次

總說	一
第一章 上代文學	
一 奈良朝以前	三
二 奈良朝時代	六
第二章 中古文學	
一 平安朝初期	三
二 平安朝中期	六
三 平安朝末期	二
第三章 中世文學	
一 鎌倉時代	六



二	吉野朝時代……………	三
三	室町時代……………	三
四	安土桃山時代……………	四
<b>第四章 近世文學</b>		
一	京阪前期……………	四
二	京阪後期……………	五
三	江戸前期……………	六
四	江戸後期……………	六
<b>第五章 最近世文學</b>		
一	明治時代……………	七
二	大正時代……………	七

〰〰〰 目次終 〰〰〰

## 總 說

文學は人間の思想感情を、文章と云ふ形を假りて表現したものである。作家は自然人事に對して、自己の情緒が感得したところを、その體驗と想像とに依つて作品とする。そこには作家の個性が現はれてゐる。またその時代相が滲み出してゐる。これを大所より見れば國民性の反映を窺知し得ると共に、廣く人生の姿をも闡明することができる。従つて年代的に文學の展開と流動とを省察する事は即ち一民族の精神活動の記録を



知得する事となる。この人生に於ける内面的事象を取扱ふものは、獨り文學のみならず、繪畫音楽等の學藝方面全般に亘るが、文學にはその素材たる言語文字の性質上、永續性と普及性を具備してゐるから、その保有する意義も重要であり、正確である。かゝる精神生活の進化を攻究することは政治外交軍事の如き外面的事象に偏するもの、缺陷を補つて、國民が辿つた文化的發達の道程を完全に把捉する事になるのである。

今、こゝに日本文学史を説かんとするものも、我等の祖先の住んだ「魂の世界」を的確に攫むことによつて、大和民族躍進の姿を眺め、更に我等の子孫が背負ふべき「明日の日本」をして、理想的發展を遂げしめんとする目的を有するのである。

## 第一章 上代文學

### 一 奈良朝以前

(皇紀一三五〇年頃まで)

上代の文學はどこを起點とすべきであらう。文字なき時代にも文學は在る。人間の感情が昂まる時、發して聲となる。聲に旋律が加はればそこに歌が生れる。口から口へ傳へられた歌謠、耳から耳へ聞き繼がれた説話。原始時代のこれらのものは所謂口誦文學として存在した筈である。今日残つてゐる上代文學は、いづれも奈良朝或は平安朝初期の文献に依るもので、傳誦の期間も相當に長年月に亘つてゐるから、幾分の變形は肯定しても、大體として太古の姿を示すものと云つてよい。

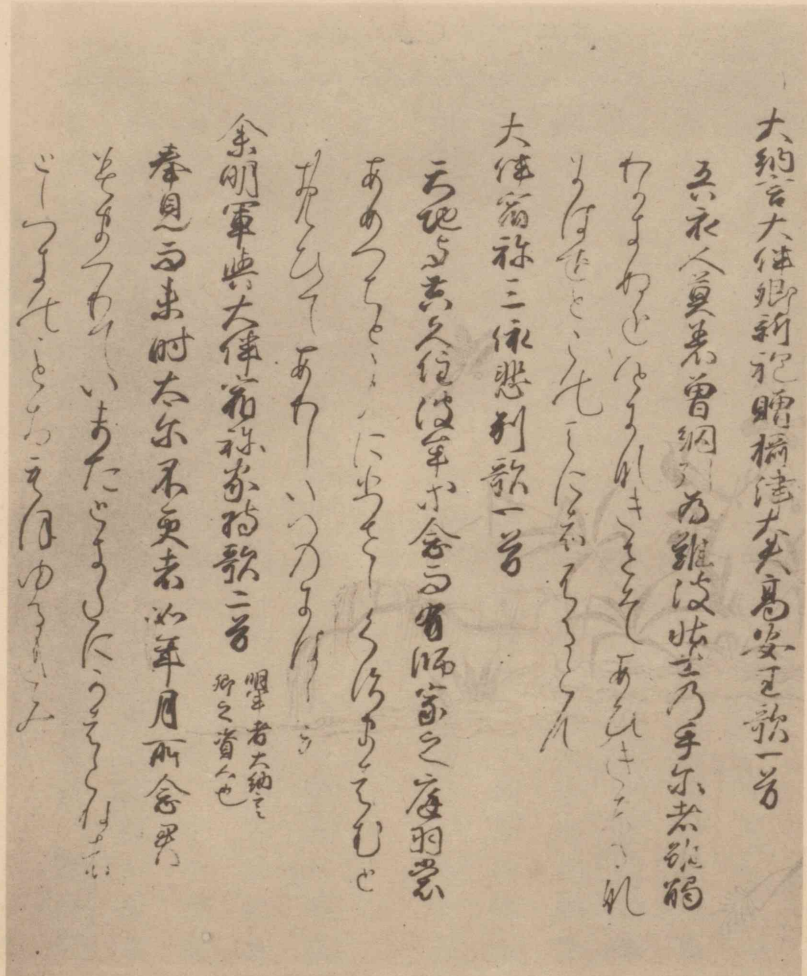
上代國民の文化的覺醒は、支那文明の輸入に據つて開かれた。



漢文の公行は應神天皇十五年と云ふけれど、阿直岐・王仁の渡來以前既に私の交通によつて漢學は行はれてゐたし、佛教傳來は欽明天皇十三年と記されてゐるが、それより早く民間にはかなりの潜勢力を保つてゐたらしい。即ち殘存せる記録が、崇神天皇の頃から詳密になつてゐる事實は、文字の弘通を語つてゐるし、應神・仁德兩天皇の朝に秦漢百濟の歸化民が一萬に達してゐた事は、一面に於て彼等の宗教が相應に擴布した證左となり得ると思ふ。かく外國文化に刺戟されたわが民族が、自國の文化促進に懸命の努力を拂つた實績は、まづ推古天皇の朝の藝術となり、更に大化改新となり、こゝに天平盛事の素地は作成せられたのである。

法隆寺佛像銘  
聖德太子  
十七箇條憲法

傳承によらず文字による最古のものは法隆寺佛像光背の銘（推古天皇の朝、宇治橋の碑、孝德天皇の朝）があり、聖德太子の十七



御物 桂本萬葉集



歌謠

箇條憲法・勝鬘經疏などがある。しかし純文藝の方面では、古事記・日本書紀によつて傳へらるゝ歌謠がある。この種のもものは風土記の中にも見え、又萬葉集の作者不明の歌をも加へて見ねばならぬ。而してこれらのうち、應神天皇以前のもものは口授傳誦に依る歌謠であり、仁徳天皇以後のものは記録された年代と大した距離のない頃の作品であらう。作風は現世的光明的で、取材は概ね眼前の事物に求め、表現は素朴であり、思想は幼稚であつた。

祝詞

歌謠を個人的抒情詩と見れば、當代の散文たる祝詞は民族的抒情詩と謂つてよい。祝詞は天皇即現神の命によつて神に告り申し上げる言葉で、「のりとごと」とある。その本質は國家安穩・國民幸福を祈願するにある。豊葦原瑞穗國が農事を生命とする國柄であるため、その方面の祝詞が多い。「祈年祭」「大祓祭」の祝

祈年祭  
大祓祭



詞の如きは構成雄大、措辭また崇重で、對語重言を反復する點に、一種の律語調があり、詩と稱するに足るものである。

## 二 奈良朝時代

元明天皇——光仁天皇（和銅から寶龜頃まで約百年——西曆八世紀頃）

奈良朝に入つてまづ現はれたものを「古事記」とする。史籍に關しては履中天皇の朝、諸國に史官を置かれ、推古天皇の朝には聖德太子が天皇紀・國紀以下を撰述せられたが、その後兵火に亡び、上古の史乘の徵すべきものが無くなつた。そこで天武天皇が諸家傳承の舊記を整理せられ、舍人稗田阿禮と云ふ博聞強記の者に誦習せしめられたのを、元明天皇の和銅四年に太朝臣安麻呂が聽取して翌年撰了つた。これが「古事記」である。神代卷、神武天皇から應神天皇まで、仁徳天皇から推古天皇までの上

古事記

太安麻呂

中下三卷とする。このうち興趣の多いのは神代卷で、隱約なる靈筆の裏に史實を叙したものであるが、神話的色彩の顯著なる點に文學的價値を認める。

散文詩の形式を多く具へたものに「宣命」がある。即位・立后・立太子・改元など重大事件に關する内容上莊重を極めてゐるが、群臣に讀み聞かせたもので、修辭法は祝詞と酷似してゐる。現存するは續日本紀に收められてゐるものである。

この外、地理書たる數種の風土記（和銅以後）が残つてゐるが、大體漢文で誌され、古傳説を叙した個所にのみ文藝的素質を見る。猶漢文の記録には「日本書紀」元正天皇の朝、養老四年撰がある。

當代の文學として特筆しなければならぬのは、云ふまでもなく和歌を集大成した「萬葉集」（二十卷）である。現存せるわが國最

宣命

風土記

日本書紀

萬葉集



初の歌集で仁徳天皇の朝より淳仁天皇の天平寶字三年(主としては舒明天皇以後百三十年間)までの和歌が集められ、作者には天皇皇后の尊きより田夫野人の卑しきまで、あらゆる階級を網羅してゐる。歌は長歌(二六二)短歌(四一七三)旋頭歌(六一)から成り、長歌全盛の趣を見せてゐる。當時は未だ假名の發明なく、漢字の音訓を假りて記してゐた。後世これを萬葉假名と呼ぶ。古事記が既にこの方法を用ゐたが、萬葉集になると文字の用法はかなり自由になつてゐる。撰述に關しては明かでない。孝謙天皇の朝に橘諸兄が諸卿と謀つて撰定したと云ひ、諸兄の着手したのを大伴家持が増修したと云ひ、或は家持の私撰であると云ふ。要するに撰定に關して家持の力が多く加つてゐる事は否定できまい。内容には抒情の歌多く、特に相聞の歌、旅の歌にすぐれたものが見える。また東歌、有由縁歌など特殊の吟詠

もある。

柿本人麿  
山邊赤人

山上憶良

大伴家持

作家として代表的の人々には、藤原宮時代(持統・文武兩天皇の御代)の柿本人麿、山邊赤人がゐる。人麿は長歌に優れ、雄大壯麗の作風を持ち、赤人は短歌に長じて典雅暢達、多く自然を詠じた。また外國思想を融化して深味ある山上憶良。叙事詩風の作を物した高橋虫麿。現世の悦樂を歌つた大伴旅人などがあり、女流には額田女王、坂上郎女等を數へる事ができる。降つて天平時代に入ると大伴家持が歌壇統帥の位置を占めたが、數奇なる一生は歌に終始し得なかつたのか、晩年の作は見えない。前代歌人の長を拮据し努力した形跡はあるが、渾成にはまだ到らなかつたらしい。その他には田邊福麿、家持の妻阪上大嬢、また茅上娘子などが秀れてゐた。

以上の歌人の詠はすべて萬葉集に收められてゐるが、萬葉集



上代の小説

以前にも「類聚歌林」・「古歌集」等、五六の歌集があつた事を萬葉集に引用されてゐるので知る事ができる。

更に上代文學のうちから小説の發芽を物色する事もむりではない。それは「古事記」に見える神話的色彩の濃厚な個所、風土記にあらはれた古傳説、萬葉集中の世俗に關する傳説風の話を含むものなどで、これらは皆原始的形態の小説と云つて差支へない。例へば「古事記」の八股の大蛇・稻羽の白兔・わだつみの宮、風土記の浦島子、比治の眞名井、萬葉集の櫻兒・猪名川・眞間手古奈、柘枝傳説などはそれである。而して此等が殆んど歌謠を伴つてゐる事は歌物語の名稱の發生を肯定させ、しかもその間に幻想的傾向を多分に湛ふるものには、支那小説（遊仙窟など）の影響の著しかつた時代の面影を偲ばせるのである。

かくして奈良末期に入ると、和歌は漸次目に訴へる傾向即ち

讀む歌が多くなつた。そこで從來の眞情吐露の作風は技巧彫琢の才を争ふの風尚に一變した。これは明かに漢詩文流行の感化であつた。

懷風藻

詩文は和歌の衰運に對して著しく勃興した。「懷風藻」天平勝寶三年淡海三船撰か）はわが國最初の詩集である。作家には近江朝の天津皇子、奈良朝の藤原宇合うががある。當期の詩人安倍仲鷹、淡海三船、石上宅嗣等の作品は、この集には見えず、平安朝初期の「經國集」に收まつてゐる。

わが上代文學は何と云つても未だ黎明の時代であつた。當代文學の中核たる和歌にしても、黎明期特有の「素朴なる文學」と云ふ様相から離れてはゐない。しかしそこから永遠いつくしみの曙光あけぼのが射しそめてゐることを忘れてはならないのである。



## 第二章 中古文學

### 一 平安朝初期

桓武天皇——宇多天皇(延暦から寛平頃まで約百年間——西曆九世紀頃)

平安朝初期の前半は弘仁前後を中心とする漢詩文流行の時代で唐朝模倣の風潮いちじるしく、外國文化の浸潤期に當り、後半は貞觀寛平の頃で和歌復興によつて、文藝思潮が一轉化を示し、和歌直系の歌物語から散文本位の物語に推移せんとした時代であつた。

詩文の隆昌は新興日本として當然の道程であつた。奈良朝以來遣唐使によつて支那文化は絶えず輸入されてゐたが、晩唐亂離に際して公の遣使は途絶した。しかし留學僧は引續いて

紀 貫之筆 (高野切)

### 古今優河集卷第百

#### 秋歌下

これこそこのみくらせりつらうるあそを  
よよあそ

そむわのあそを

そらうらたあそものそらうらたしうられそ  
ひらわあそあそあそあそあそあそあそあそ



彼地に赴き、これらの齋す新智識は長年月に亘つて大なる收穫として現はれたのであつた。これと共に、教育機關も具備し夙に大寶令によつて京には大學、諸國には國學が設けられたが、當代に到つて貴紳の手に依つて幾多の私學が興起した。當時官吏の任用は明經・明法・紀傳・算の四道で、その考試は専ら對策文章によつて才能を試みたので、詩文隆盛の風潮を助成した。當時、最も愛誦されたものは、文選、白氏文集であつた。かくして學校は文章道全盛となり、菅原・大江二氏は文學の家となり、榮達を謀るの士は悉くその門に學んだ。

弘仁前後の詩人としては嵯峨天皇有智子内親王を初めとし、菅原清公・小野篁が知られてゐる。空海は宗教界の巨人であると共に文學上の傑物であり、文鏡秘府論は詩の法格を論じて、早くも詩歌論の先驅となり、その詩才の非凡は、性靈集によつて窺



菅原道真

はれる。や、遅れて都良香あり、更にまた菅原道真、紀長谷雄が現はれた。道真の菅家文章、菅家後草は詩人として不朽の光を放つてゐる。猶當代の勅撰詩集に「凌雲集」「文華秀麗集」「經國集」がある。

凌雲集

六歌仙

在原業平

和歌は漢詩文に壓倒されてゐたが、清和天皇の朝以後漸く擡頭の機運を得、貞觀から寛平へかけて所謂六歌仙が輩出した。在原業平は阿保親王の子、藤原氏の權勢漸く盛ならんとする際に生れ、一生を不遇の中に終つた。奔放不羈の性情はその歌にあらはれ、格調の自由と詩想の深刻とは、和歌史上稀に見る情熱の作品を生んだ。抒情歌人としては小野小町これに次ぎ、僧正遍昭も亦當代の名手と云はねばならない。その他、大伴黒主、文屋康秀、喜撰法師の三人は、現存せる和歌のみでは歌仙の名にふさはしくない。むしろ藤原敏行、在原行平、また道真を擧ぐべき

小野小町

であらう。猶古今集に見える、讀人しらずの歌の多くは、當代の人々の作らしく、萬葉集の剛壯素朴の歌風は、こゝに至つて漸く優婉・技巧の諧調に移らんとした。

假名の發生と弘布とは、こゝに散文の發達を見た。ここに小話集の形をとる原始的な歌物語と、ある構成のもとに説話の展開する物語とがあらはれた。前者には「伊勢物語」があり、後者には「竹取物語」がある。「伊勢」は古歌及び業平の歌を中心に置いてそれ／＼小話を附與したもので、各節は昔男なる一人物によつて繋がれた巧妙なる説話集である。「竹取」はこれに對して、月宮の嫦娥かぐや姫と、これを圍繞する貴顯とを寫した傳奇物語である。西曆九世紀に當るこの時代、既にかゝる整然たる小説を有することは大なる驚異と謂はざるを得ない。

この頃の歌謡には、祭祀の典式として神前で行はれた音樂の

伊勢物語

竹取物語



歌曲たる神樂歌と、民謡と思はるゝ催馬樂とがあつた。

## 二 平安朝中期

醍醐天皇——後三條天皇(延喜から延久頃まで約二百年間—西曆十—十一世紀)

平安朝中期は文化の燦爛たる時代であつた。前半は延喜・天曆朝で、醍醐・村上兩天皇の御宇に當り、後世からは聖代として讃仰せらるゝ黄金時代である。後半は寛弘・康平期で所謂御堂關白が望月の缺くることなき榮華の絶頂時代である。文學の上から、前期を和歌隆昌時代と呼べば後期は散文全盛時代と謂ふべきであらう。

久しく輸入せられた支那文物も既に融化せられ、覺醒期に達した當代の日本は、文化の伸展と共に國民の自信を喚起し、こゝに純眞なる民族的情感を盛つた和歌が勃興したのである。か

古今集

紀貫之  
凡河内躬恒

くて延喜五年最初の勅撰歌集「古今和歌集」二十卷は成つた。萬葉集以後當代までの歌を集録した。内質は主觀的抒情を主とし、格調は優麗婉雅、長く後世への範を垂れた。撰者は紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人である。越えて約四十年、天曆五年に至り、宮中の梨壺に和歌所が設けられ、後撰集が撰ばれた。當代の歌人には、古今時代の人々は撰者の外に清原深養父・素性法師・大江千里があり、後撰時代には當代の學匠源順を初め大中臣能宣・壬生忠見があつた。寛弘の頃に入つて「拾遺集」が出た。古今後撰・拾遺を三代集と稱す。折から御堂殿の極盛時代に當り、和歌の唱和贈答は日常生活上缺くべからざるものとなり、優秀の歌人輩出して互に才を競ひ能を争つた。博學と才幹とを以て一世に鳴つた藤原公任、抒情歌人の粹たる和泉式部を初めとし、曾根好忠、能因法師、赤染衛門等を數へることができる。

三代集

藤原公任  
和泉式部



土佐日記

假名の發達は文章に革命的變動を與へた。當時文章と云へば漢文と思惟する慣習になつてゐた。然るに假名文興隆の機運は貫之によつて文學史上に確乎たる地位を獲得するに至つた。古今集序、大堰川行幸和歌序及び土佐日記はこれである。

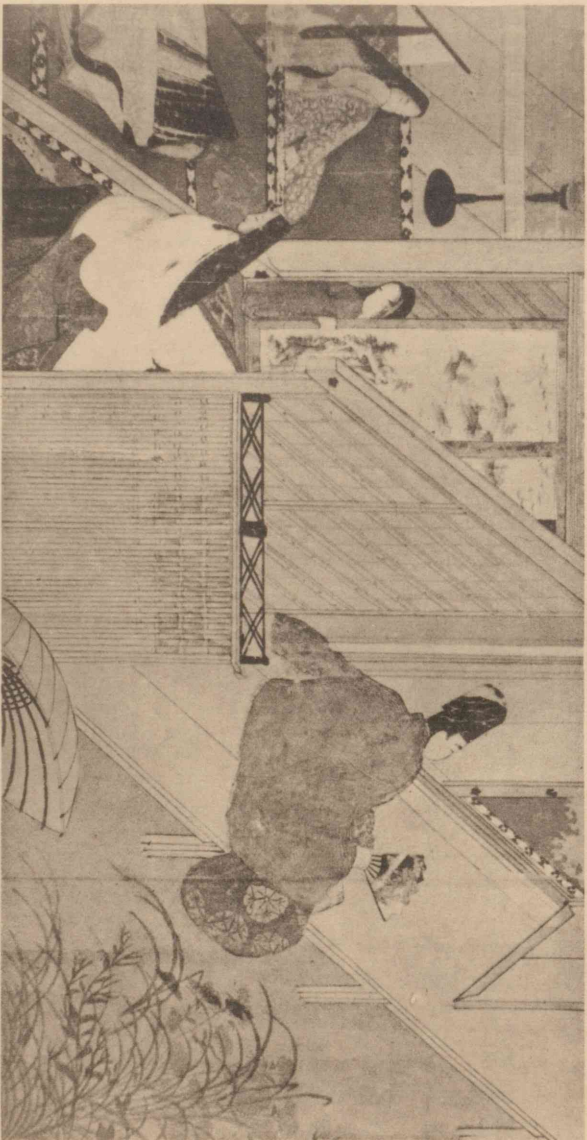
蜻蛉日記

「土佐日記」は國司の任滿ちて歸京するまでの旅日記で、簡淨淡雅國文の規範と稱せられてゐる。遅れて「蜻蛉日記」が出た。右大將道綱母の筆で、一女性の内部生活を寫して、惻々人に迫るものがある。御堂殿時代に入るや、才媛の手に成る多くの日記があらはれた。「和泉式部日記」「紫式部日記」はこれである。康平の頃に出た菅原孝標女の「更科日記」は、繊細な感情に生きた平安朝女性の姿が、最もよく反映してゐる。

更科日記

宇津保物語  
落窪物語

日記と云ふ主觀の域から離れて同じ生活相を如實に描かうと試みた客觀的作品が物語である。當代の「宇津保物語」「落窪物



(家川徳) 卷繪 語物氏源 東屋



語はこれで、同じく貴族生活を寫しながら、前者には猶、幻想的場面が見えたが、後者では主題の繼子いぢめが長く後世に影響を與へた。この外歌物語の系統を引く逸話傳説を集録した、大和物語がある。

かゝる間に古今に冠絶する大作「源氏物語」が生まれた。全篇五十四帖、その中、前の四十帖は源氏の君を主人公としてその一生を描き、後の十帖は源氏の子薫大將を中心としてその半生を寫した。而して中間の四帖は源氏薨後から後段への橋渡しの部分に當る。場面は時に須磨、時に宇治と多少の變化はあるが、大體として京洛の地を出でず、平安宮裡の實生活を鮮明に描きつゝ、これに帝城を音訪るゝ、四季折々の風物を點綴して、かの人事とこの自然とを渾然融化され、王朝時代の大宮人の姿がわれわれの眼前にまざ／＼と生動してゐる。作者紫式部は一條天



皇の中宮上東門院に仕へた宮女である。その日常目堵する現實相に一片の理想を託して創作化したのがこの物語で、精緻なる脚色の中に動く人物の性格は眞に躍如たるものがある。これ實に、わが國文學の代表作たるのみならず世界文學に於ける最傑作の一である。「源氏」出でて後の物語はすべてその餘波をうけた。「狭衣物語」「濱松中納言物語」などはこれである。

物語の「源氏」と並稱されるものに隨筆「枕草子」がある。清少納言の筆である。一條天皇の皇后定子に仕へ、その平生の見聞やら感想やらを秩序なく書きとめたものであるが、奇警な洞察力と鋭敏な感受性によつて才華煥發、端倪すべからざるものがある。世に源氏物語・枕草子を並稱して平安朝文學の双璧と云ふ。

翻つて詩文を見るに天曆の頃大江朝綱菅原文時が出てや、

枕草子  
清少納言

和漢朗詠集  
和名抄

復活の兆を示したが、その歿後著しく凋落した。たゞ寛弘の頃には大江匡衡・大江以言（よこ）の名家がゐた。詩集には「本朝文粹」あり、詩と歌との雜集に「和漢朗詠集」「公任撰」があつた。この外、天曆時代の學者源順に「和名抄」があるが、これわが國に於ける最古の辭書である。

### 三 平安朝末期

白河天皇——安徳天皇（承保から壽永まで約百年間——西曆十二世紀）

當期は藤原氏の權勢漸く衰へて、武士が取つてこれに替らんとした時代である。新しく覇權を握つた平氏も、王朝文化に蝕まれて公卿化した結果、同じく歿落の悲運に陥り、京洛の地は禍亂の巷となつて、長篇大作出づるに由なく、文學の核心は獨り革新途上の和歌に存した。



後拾遺集

源經信

源俊賴

金葉集

詞花集

千載集  
藤原俊成

和歌は長く勅撰の沙汰なく、拾遺集の後約百年にして、後拾遺集が撰せられた。當時の歌人には撰者藤原通俊の外に、大江匡房・源經信がゐた。經信は和歌革新の志を抱き、從來輕視された敘景の方面に新しい道を開拓し、用語の自由と題材の擴大とを主張した。この新歌風樹立に力あつたものを經信の子俊賴とする。その歌集を「散木弃歌集」と云ふ。彼は白河上皇の院宣によつて「金葉集」を撰した。新派の詠風はこゝに飛躍したのである。次で藤原顯輔が「詞花集」を撰した。世上に反抗の聲も起つたけれど、金葉・詞花二歌集が持つ和歌史上の新運動は遂に時代の風尚となつた。進取的な俊賴に對して保守的であつた歌人に藤原基俊がゐた。而してこの新舊兩派を折衷して更に一段高く表現したのが「千載集」の撰者藤原俊成であつた。その家集には「長秋詠藻」がある。俊成と並んで時代の歌壇に重んぜられ

西行

山家集

堤中納言物語

且後世から渴仰せらるゝものを僧西行とする。彼の吟詠を見るに抒情はよく人生の機微に觸れ、叙景はよく自然の核心を捉へ、また時代の歌たる情景一致の境地を體現しては、渾然たる詩興の昂揚を見せた。彼は人間の心を深く掘りさげて、そこに本然の姿を攫んだ人である。「山家集」はこの魂の動きを如實に語つてゐる。猶當代の歌人としては源賴政・僧俊恵があり、後の「新古今集」の人々の多くも既に頭角をあらはしてゐた。歌論は和歌隆昌と共に急激に發達し、論客には藤原公任の後をうけて、源俊賴・藤原清輔があり、俊成亦作歌の理想として所謂「幽玄體」を唱導し、歌合の批判にその秀拔な才能を發揮した。

小説は次第に低調となり、とりかへばや物語「夜半の寢覺」などが出たが、むしろ短篇集「堤中納言物語」に卓絶した手法を發見する。そのすべてに亘る構想の奇警と描寫の精彩とは王朝小説



榮華物語

掉尾の逸品と云ふを憚らない。

事實物語の假名の國史には「榮華物語」がある。關白道長の榮華を中心としてその豪華生活を禮讚したものである。四十帖の浩翰なものであるが行文優柔に過ぎ冗漫に陥つてゐる。同じ題材を取扱つて精彩あるを「大鏡」とする。冒頭の脚色に新機軸を出し、道長の榮華を寫すと共に逆境の人、伊周・隆家に對して油然たる同情を灑ぎかけてゐる。勁拔なる詞章によつて、よく人物事件を活躍せしめてゐる點は、歴史物語中の白眉である。「大鏡」の後を繼いで「今鏡」が出た。

大鏡

今昔物語

猶、散文の世界に於て逸してはならないのは「今昔物語」である。天竺・震旦・本朝の三分に分たれ、三十一卷に盛られてゐるのはすべて三國に關する傳説・説話である。この東洋傳説を國語化し且集大成した點に、本書の價值がある。編者を源隆國とする。

源隆國

詩文も末期に至つてや、活氣を呈し、大江匡房最も名高く、廷

臣の間には歌合に對して詩合が行はれた。

歌謡には今様と朗詠とが行はれ、藤原基俊は「新撰朗詠集」を撰した。又當代の歌謡を廣く蒐集したものに「梁塵秘抄」があつた。後白河法皇の御撰と云ふ。

今様  
朗詠

梁塵秘抄



## 第三章 中世文學

## 一 鎌倉時代

後鳥羽天皇——花園天皇(建久から文保頃まで約百二十年間—西曆十三世紀)

社會の實力が宮廷から武門に移つた時、文化の中心は自ら二分された。京の公卿が慣習典例に固執して、王朝文化の擁護に汲々とし、何等の發展も向上も示さなかつた間に、東に崛起した武士は、現實に立脚した別趣の文化を樹立せんとした。こゝに於て京都と鎌倉、公卿と武士、有職和歌の道と武技心術の法とは、相對峙するの姿となつた。元來舊文明は感情的、女性的で意志を缺き、新文明は意志的、男性的で情念に乏しい。一を優雅と云へば他は雄樸である。この風潮は直ちに文學に反映して、小説

物語の如き想像力を要求するものは漸次に衰頽し、見聞を主とし事實を記録する戦記雜纂が多くあらはれた。また當世に嫌りない者が常に抱く前代憧憬の思想は、こゝに擬古文と古典注釋とを生じ、空虚なる精神に慰安を求めては宗教の袖に縋り、かくて多様なる佛教文學が産み出されたのである。

而して更にこの新舊思潮を全然別個のものとして、渾和融合を見せた新様式の文學もあつた。勇壯なる戦闘を對象として、剛快の時代相を寫すと共に、豊艶なる浪漫的場面に王朝式情調を描くを忘れなかつた戦記物語は、その内質上の現はれである。又男ぶみたる漢文と女ぶみたる假名文とを調節し、更に新宗教勃興の機運に乗じて佛語を攝取し、それらを巧みに縫合させた和漢混淆文は、その形式上の現はれである。

かく舊套と新彩との交錯のうちに、時代の面影は次第に濃厚



となり、作家から見れば、廷臣から隠逸の人へとその中軸は委ねられて行つたのである。

當代の初期にあつて和歌は最も盛んであつた。元久二年「新古今集」の撰成る。源通具・藤原定家・家隆・有家・雅經を撰者とする。その内容を見るに抒情は複雑な心象を自由に表現し、思想に一段の深味を加へ、叙景は技巧の細緻と相俟つて自然の核心を把握した。而して情景融合の詩境に至つては眞にその極致に達した。かくして措辭の瑰麗、格調の清新は遂に歌界に一新紀元を劃したのである。作家には天稟の歌人後鳥羽上皇を初め奉り、撰者定家・家隆の名家あり、その他にも後京極良經、後徳大寺實定、僧寂蓮、慈圓、女流には式子内親王、宮内卿など詞藻の豊富なる人才が頗る多い。古今より新古今までの勅撰集を總括して「八代集」と稱する。

新古今集  
藤原定家  
家隆

後鳥羽上皇

八代集

六家集  
源實朝  
金槐集  
右京大夫集

顯昭

猶當代の歌集には、千五百番歌合があり、家集には定家の「拾遺愚草」、家隆の「壬二集」、良經の「秋篠月清集」、慈圓の「拾玉集」があるが、それに俊成の「長秋詠藻」、西行の「山家集」を加へて「六家集」と稱してゐる。その外には源實朝の「金槐集」と、建禮門院に仕へた右京大夫の集に獨自な境地を発見する。

定家歿して、子の爲家が繼いだ。がその後は二條京極、冷泉の三家に分派して互に争ひ、歌道は漸く衰運に向つたのである。俊成・定家・爲家三代の隆運に棹す二條家正系に對して、六條家の名手清輔と歌論家たるその弟僧顯昭の名を逸する事はできない。小説は前代の宮廷物語の遺鉢を享けたもので、作爲に何等の新様も發展もなかつた。比較的秀でたものは「石清水物語」であらう。

同じく王朝の餘韻を傳へるものに「日記紀行」がある。「辨内侍



阿佛尼  
轉寢記  
十六夜日記

海道記  
東關紀行

鴨長明  
方丈記

日記「中務内侍日記」は宮中の行事を語る外、價值は低いが、阿佛尼の筆になる「轉寢記」と「十六夜日記」とは行文流麗、出色の文字である。前者は若き日の彼女の心の影を誌したものであり、後者は年老ひし身をその子爲相のために鎌倉へ赴いた時の旅日記である。「海道記」「東關紀行」も同じく京から鎌倉への東海の行旅を寫したものであるが、駢儷體の華麗な新文章で綴つてある。作者は源光行及びその子親行に、それ〴〵擬せられてゐるが信じ難い。その他、宗教的色彩あるものに平康頼の「寶物集」、無住法師の「沙石集」があるが、獨り鴨長明の「方丈記」に油然たる詩趣を見る。相續く天變地異に戦き慄ふ魂の記録は、朗々玉を轉ずるの諧調と共に沈寥の氣肌に迫るものがある。單に無常を觀じ厭離を念ふのでなく、琴書を友にして現世への執着を斷ち得ないところに、此の作者の人間性が窺はれる。

保元物語

平治物語

平家物語

當代文學の中樞であり最も特色あるを戰記物語とする。「保元物語」「平治物語」は斯界の先驅としてあらはれ、簡素雄勁の筆致はよくこの二争亂を描破して餘りがある。作家には葉室時長その他二三の人に擬せられてゐるが確證はない。次で「平家物語」を見た。治承の春に榮えて壽永の秋の哀を止めた平家二十餘年の興亡を中軸として、有爲轉變の人生の姿を如實に語つたものである。描き出された場面には戯曲的色彩が濃厚で、詩興頓に昂まり、その表現には或は雄渾・悲壯、或は凄艶・哀愁、眞に一篇無韻の叙事詩である。「源平盛衰記」は同一題材に據るが、記述精細で文章瑰麗を極め、却つて煩雜不整に陥つた感がある。

當代に於ける説話文學は、かの今昔物語の後をうけて幾多の述作を見た。過去の逸聞を搜り、當世の巷談を漁るところに時代の氣分があらはれてゐる。建保頃の「宇治拾遺物語」は多趣多

宇治拾遺物語



十訓抄

古今著集

様の話柄を保有して、行文また暢達である。「古事談」「讀古事談」はこれに比べて著しく劣る。遅れて教訓的傾向の強い「十訓抄」「逸事好話の集録たる」「古今著聞集」が出た。著聞集は建長六年橘成季の作で、豊富なる材料が三十の部門のもとに整然と配列されてゐる。筆致また雅潤穩健で、國民説話の集大成と云ふべきであらう。

假名文の歴史物語には「水鏡」がある。「大鏡」に記述された以前の史實である。(これに今鏡を加へて世に「三鏡」と呼ぶ。或は今鏡を省いて後に出た増鏡を加へる事もあり、また凡てを「四鏡」とも稱してゐる)。この外、上代よりの治亂興亡を記し特に保元亂後を詳述した「愚管抄」がある。また漢文で誌した記録に鎌倉幕府の撰述せる「吾妻鏡」「日本佛教に關して師鍊(虎關)が執筆した」「元亨釋書」など浩翰なる大著があつた。

「三鏡」

吾妻鏡  
元亨釋書

宴曲

終りに當代の歌謠として宴曲なる謠物があつた事を附記しておく。前代の朗詠今様から次代の田樂・猿樂に至る中間の歌謠として存在の意義がある。

## 二 吉野朝時代

後醍醐天皇——長慶天皇(元應から元中まで約七十年間——西曆十四世紀)

吉野朝の文學は前代繼承より多くを出なかつた。建武中興に多少の活氣も見えたけれど、幾程もなく世は陰雲に鎖され、半世紀に亘る此期間は、兵馬倥傯の間に夢と流れ、殊に逆境の芳野宮には、わが宿と頼まずながらに幾年の春も過ぎ、治まらぬ事しげさに櫻かざして暮す日もなかつたのである。さればこそ文藝の若草も新しく生ひ立つまでに至らず、平安朝以來の思潮を反復するにすぎなかつた。



新葉集

和歌に勅撰の沙汰はあつたけれど囚はれた歌風の繼承で停滯殆んど云ふに足りない。冷泉派に屬する「風雅集」、二條派の手に成つた「新千載集」等はそれであつた。かゝる時これに拮抗して南朝の人々の作を集録したのが宗良親王を撰者とする「新葉集」であつた。作者はいづれも轆轤不遇の人、切實な體驗から生れ出でたその咏詠に、激越悲憤の格調があるのは自然の數で、當代の歌界に獨り光彩を放つてゐる。當時和歌の四天王と稱せられたものを頼阿・兼好・淨辨・慶雲とする。その中、頼阿の「草庵集」は近世期に至るまで讃へられたが、たゞ二條派の古格を守る無難の作風たるにすぎない。この頃、二條良基は頼阿に學び門地の高きと學識の博きを以て聲望を一身に集めてゐた。

連歌は當期に至つて隆運を向へた。問答唱和の形式をとる歌謠は奈良朝以前にもあつた。それが短歌の上下二句の關係

頼阿

二條良基

菟玖波集  
連歌新式

兼好  
徒然草

を持つやうになつたのも殆んど同時である。平安朝では掛詞縁語で軽い諧謔を試みる程度のものであつた。それが鎌倉期になると、比較的優雅なものを「柿の本」(有心)、滑稽なものを「栗の本」(無心)として二つに分れたが、後には「柿の本」のみが行はれた。當代に至つてこれを流行に導いたものを良基とする。彼は救済に命じて「菟玖波集」を撰ばしめ、且共に「連歌新式」(應安新式)を編して連歌の一般法則を樹立した。

散文の方面では、まづ歌人として知られた兼好に「隨筆」(徒然草)がある。或は無常を説き隱逸を讃し、或は閑適の趣を語り人情の機微を穿つ。その思想には佛老莊の融化を見るが、要するに情念・傳統を生命とする王朝思潮と、厭世・超俗の中世思潮との新舊兩面が混淆してゐる。これは當代社會相そのもので、時代の深刻な體驗者たる兼好に反映したのに外ならない。もし藝術



増鏡

北畠親房  
神皇正統記

太平記

的價值からのみ云へば、逸話小品の描寫に於ける彼の豊かな天分を指摘したい。「枕草子」と並んで隨筆の双絶と稱されてゐる。

歴史物語には痛ましい現實の姿を反照した、増鏡がある。承久亂以後の變革を優婉暢達な詞藻を以て叙した。また堂々の論、正大の氣を、筆端火を噴くの慨を以て草した北畠親房の「神皇正統記」は獨自の價値を要求する。

「太平記」は戰記物語の直系にあるもので、重要な作品である。全體として構成に統整を缺き、行文や、濃彩に過ぐるの難はあるが、雄大にして豊麗の詩筆には興趣縱横なるものがある。而して内容の取扱に就て云へば、平家物語に見える情念主義はここに一轉して意志尊重の時代相を帯び來つたと云へる。作者には小島法師の名が擧げられ、また僧玄惠が擬せられてゐる。

### 三 室町時代

後小松天皇——後土御門天皇(應永から明應頃まで約百年—西曆十五世紀)

室町時代の前期は所謂「東山時代」に當り、將軍の享樂的傾向はこゝに劇文學の興隆を誘致し、且藝術各方面に亘る新風を樹立した時期であつた。而して後期は、應仁以後の麻の如き亂世ではあつたが、この荒涼の中にも連歌俳諧の新鮮な伸展を見たのである。

今川了俊

正徹

まづ和歌は二條派隆昌の後をうけて、冷泉家の流を汲む今川了俊と僧正徹とが反抗の聲をあげ、頼阿の平板を難じて、定家復歸を叫びその幽玄體を提示した。正徹の「草根集」には自由と清新とに非凡な才藻が窺はれる。しかしこの新運動も一時的現象にすぎず、大勢は二條風を離るゝことなくして已んだ。應仁



一條兼良

東常縁  
古今傳授

の頃一條兼良は當代の碩學として聞え、歌林良材抄等の歌學の著があつた。三條西實隆も亦歌人として名が高い。當時武人に東常縁なるものがゐた。歌界に聲名を謳はれたが、古今傳授は彼によつて創案せられたのである。

宗祇

新撰菟玖波集  
水無瀬三吟

連歌は普ねく庶民の間に弘布して連歌師なる職業をさへ生ずるに至つた。良基以後、名手として知られたものに心敬があり、次で宗祇があらはれた。宗祇は叡山の麓に庵を結んで種玉庵と號したが、羈旅を好み、殆んど一生を漂泊行脚のうちを過し、箱根湯本の旅寓に逝いた。彼が後柏原天皇の勅によつて編した、新撰菟玖波集は連歌の指針となつた。門下に猪苗代兼載、柴屋軒宗長、牡丹花宵柏がゐた。「水無瀬三吟百韻」は宗祇、宵柏、宗長の作である。

當代の新興藝術としては謡曲を挙げねばならない。謡曲は



偶田川

演能舞台面

(觀世)



羽衣

演能舞台面

(觀世)



「能」(猿樂能)の詞章である。能は當時藝能とも云ひ何等かの筋ある一種の劇的要素を有したものであつた。平安朝以來の諸種の技藝を集成した猿樂には、曲藝茶番の風が多分にあつたが、さう云ふ間から眞摯な劇が芽ぐんで來た。而して喜劇的分子は分離して、白本位せうほんの狂言の發生を促し、舞本位の筋書あるものが脚色されて、能の出來上る素地を作つたのである。こゝに大和の觀阿彌その子世阿彌なる者が出て、在來の技藝を融合し整理して、能の大成を見るに至つたのである。能の本質は歌と舞と物眞似との三つから成る。歌は音曲であり、舞は身振であり、物眞似は所作事である。當代の歌舞の節廻しや、舞踊の長所を採擇した綜合藝術が即ち能樂であつた。詞章たる謠曲も亦古歌古文辭を補綴したものであるが、よく諧調を保ち詩趣が深い。現存する謠曲は約三百番ある。そのうち羽衣、熊野、松風、安宅、隅



田川等を代表作とする。而して構想の多くは、行脚僧が名所舊蹟を弔ふと、村翁村婦が通りかゝつて故事來歴を語る。それは昔の英雄麗人の假の姿で、終りに自ら名乗りをあげ供養を願つて解脱成佛すると云ふ筋である。その題材は史的傳説、民間説話など、王朝憧憬と英雄崇拜との新舊二大思潮の合流に據るものが多い。而してその中心思想は、人生の夢幻を説き、現實の脱離から未來の冥利を欣求してはゐるが、更に進んで現世の幸福を把持するための信仰をも説いてゐる。こゝに厭世的人生觀から光明的人生觀への時代的展開の一面を觀取することができる。謠曲の作家には觀阿彌(結崎清次)世阿彌(元清)音阿彌(元重)金春禪竹(氏信)の名を挙げねばならないが、特に元清は優れ、その「世阿彌十六部集」には藝術批評としての犀利な識見が窺はれる。因に能の流派としては結崎(觀世)外山(寶生)坂戸(金剛)圓滿(井)金春の四座があり、別に金春、或は金剛とも云ふの分派に喜多流がある。

世阿彌元清  
十六部集

狂言は謠曲と同根の双枝をなすものである。猿樂の滑稽的な一面が獨立して、戯曲的構成を保つに至つたのである。約二百番あるが、いづれも錯誤の可笑味を初めとし、矛盾不合理又は言語上の遊戯を取扱つてゐる。人物には教養なき武士、破戒の僧侶、靈驗なき山伏など、手近にモデルを求め、非常識な大名に對して狡智な冠者、怠惰な亭主に我儘な女房など、當代に於ける下尅上の風潮が反映してゐる。題材には茶湯連歌などの流行事象、争入、召抱、系圖争、訟訴事など、世態の種々相によつて民庶生活が如實に寫されてゐる。作品には「萩大名」どぶかつちり、「瓜盜人」などが名高い。作者は不確であるが、大藏流の祖金春四郎二郎などの作もあると云ふ。思ふに彼の在世した應永の頃から漸

萩大名、等



次大成されて行つたもので、現存のものには次期以後江戸時代に亘つての作が混入してゐるであらう。

歴史物語には京洛を馬蹄に踏みにぢつた應仁の大亂を誌した「應仁記」や、享徳前後の關東の争亂を寫した「鎌倉大双紙」などがあつたが、文學としては極めて低調であつた。かゝる社會的大事件を對象とするものより、英雄傳説風の稗史にむしろ優れた作を見た。數奇なる運命の「人源九郎の一生を語る」「義經記」「孝道に殉じて悲壯なる最後を遂げた若い兄弟を描いた」「曾我物語」はこれである。この二作品は自らの價値よりも、他に與へた影響に重大なるものがある。當代の謠曲を初め、舞の本、小説、戯曲など、後代文學への刺戟は極めて顯著である。これは主人公の薄命に對して邦人の仁俠的精神が強烈に働きかけて、そこに生じた深い愛着と厚い同情とが、長く此の藝苑の名花を培つたためであらう。

義經記  
曾我物語

御伽草子

であらう。

次に當代の小説は所謂御伽草子である。王朝物語の流を細細とうけながら、近世小説に澎湃の波濤を揚げるまでの過渡期の作品たるにすぎない。かゝる史的意義のうちにも自ら時代の影は映る。その特質には宗教的色彩、教訓的風尚、滑稽諷刺の氣分などを擧げることができる。作品には、「三人法師」「百合若大臣」「物臭太郎」「文正草子」「秋夜長物語」等がある。猶童話として残る「桃太郎」「花咲爺」等の口誦文學も當代の所産であつた。

三人法師等

五山  
義堂  
絶海

當期に當つて詩文の淵叢たりしものを京都五山の緇流とする。さきに虎關夢窓あり、次で雪村あり、更に義堂・絶海の名家を出した。これらの人々の手になつた文學を五山文學と稱してゐるが、應永前後は詩文隆盛期、それ以後は註疏學勃興期と自ら二分して見る事ができよう。



#### 四 安土・桃山時代

後柏原天皇——後陽成天皇(文龜から慶長頃まで約百年間——西暦十六世紀)

室町後期は所謂戰國時代である。戰塵や、收まつた頃、軍政の中心は信長の安土、秀吉の伏見、桃山にあつたけれど、文藝は依然京洛の山河を離れなかつた。

和歌には堂上家に三條西實澄、中院通勝が居り、武人には太田持資があたが、斯道を享けて近世期復興の礎石となつたものを細川幽齋とする。その一生は足利季世の三代に仕へ、織豊時代を経て江戸初期に及んでゐる。二條の正系を継ぎ古今傳授を受けてゐた。歌論、幽齋聞書も、詠詠(衆妙集)も共に新彩を缺いてゐたが、彼の功績は古き泉を守つて廣く掬ましめた點にある。即ち彼の價値は來らんとする黎明への誘因を成した史的意義に存在する。

細川幽齋

山崎宗鑑  
荒木田守武

里村氏

閑吟集

俳諧では滑稽を主とした、栗の本が擡頭して來た。作家から云へば堂上の邊りを彷徨した連歌が民衆の手に落ちて、俳諧の獨立となつたのである。この風潮に乗じて創業の功を修めたものを山崎宗鑑、荒木田守武とする。宗鑑は飄逸ではあるが時に卑俗に陥り、守武は滑稽諧謔を尙んで、可笑味を提唱した。前者に「犬筑波集」があり、後者に「獨吟千句」がある。二人の歿後、しばらく中絶の姿であつたが、連歌方面には里村氏を宗家とし、紹巴昌叱によつて持續された。

最後に歌謡に就て一言すれば、謠曲狂言類に散見する小歌があつたが、當時の歌詞を廣く集録したものに「閑吟集」がある。次で文祿・慶長頃に行はれた隆達節の歌曲は、この流れをうけたものである。二十六字の詩形が多く、既に近世的氣分が強い。かくの如くして時代は「近世」に移動して行つた。



## 第四章 近世文學

### 一 京阪前期

後水尾天皇——靈元天皇（元和から延寶まで約七十年間——西曆十七世紀）

元和偃武以後、昌平の氣象は朗らかに行き渡つた。戰雲の漸く影を收めたあとには、文化の陽ざしが照りそめた。馬上を以て天下を治むべからずと悟つた爲政者は、學藝の興隆に留意した。學者の登庸はその第一階程であつた。初め、幕府に召されたのは藤原惺窩であつたが、彼は門人林羅山を推した。羅山は夙に程朱の學を奉じ、こゝに近世思想の中樞を樹立した。その子鷺峰は父の遺業たる、本朝通鑑を大成した。子孫代々家學を以て仕へ林家の名は學界に重きをなした。これに對して近江の中江藤樹、備前の熊澤蕃山は陽明學を唱へ、京の山崎闇齋は程

藤原惺窩  
林羅山  
本朝通鑑

朱に神道を加へて垂加流の神道を樹て、兵學者山鹿素行は復古學を説いた。

學者の登庸と共に古書の搜索出版と傳寫保存との事業が進捗した。その印行は經史類から文學方面に及び、新時代の潑刺たる隆運に乗じて、學藝復興の素地は築かれたのである。而して純文學は古典の註釋から初められた。北村季吟の「源氏物語湖月抄」枕草子春曙抄はその代表的述作である。かゝる學問的なものと共に古典の通俗譯や模擬風な作が現はれた。前者には「十帖源氏」後者には徒然草を模した「可笑記」などがある。これは形式は模倣であるが、内容は教訓を旨とするものであつた。當時、神儒佛を打つて一丸とせる所謂三教一致の思想が時代の聲として、大衆を指導せんとし、その傾向を帶ぶ多くの教訓草子を見たが、「可笑記」は實にその魁をなすものであつた。

北村季吟

湖月抄

可笑記



和歌は前代萎靡の後を享けたまゝ、當代に到つたが、細川幽齋斯界の中心として重んぜられ、その門下に中院通勝・烏丸光廣・松永貞徳があり、通勝の子通村も亦名手であつた。木下長嘯子も幽齋門下の逸才で、その「舉白集」は深草の元政上人の「草山集」と共にすぐれた歌集である。

貞門  
松永貞徳

俳諧に於ては貞徳の流風まづ行はれ、貞門の名が謠はれたがその宗とするところは卑近であつた。しかし煩雑な式目の規定によつて自らを高くした事は、幾何もなくその反動を惹起したのである。貞門から野々口立圃、松江維舟等が出て、同門の句集に「犬子集」がある。次で起つたのは談林の俳諧で、貞門の方則を排し守武時代の自由な滑稽に復歸せよと説いた。西山宗因を總帥として井原西鶴、岡西惟中等が輩出したが、その通俗自在は放埒卑陋となり、末輩は俗悪怪奇に陥つて了つた。維舟門下

談林  
西山宗因

から出て別途を歩いたものに池西言水がゐた。

翻つて小説界を見るに室町時代の御伽草子の亞流にすぎなかつた。「恨之介」「薄雪物語」の如き王朝風の名残を留めたものが世評に上つたが、亂世の後を享けた宗教心は、さきに述べた教訓風の草子と共に佛道欣求の物語を生み、「七人比丘尼」「因果物語」の作を見た。一方、支那稗史の影響によつて異彩ある翻案物があらはれた。淺井了意の「伽婢子」「狗張子」などはこれだ、後の怪異小説の桶をなし、遙かに讀本の一要素となつてゐる。當代の小説はその體裁から假名草子の名稱で呼ばれる。

淺井了意  
伽婢子

この頃既に「淨瑠璃の萌芽」を見た。この系統の歌曲は室町末期の作と思はるゝ、「十二段草子」などを扇拍子によつて謠つたが、三絃の伴奏を得ると共に、急に新彩を帯び來つた。しかし當代の淨瑠璃はいまだ語り手の時代で、作家らしきものなく、作品も

十二段草子



釋拙を極め、僅かに金平、淨瑠璃と云ふ豪快殺伐なるものが新興江戸の粗放なる氣風に投合して喝采を博したのみであつた。要するに、當期の文學はすべて啓蒙思潮に依つて一貫された状態にあつたのである。

## 二 京阪後期

靈元天皇——桃園天皇(天和から寛延まで約七十年間——西曆十八世紀)

當代前半の中心期にあたる元祿前後は、自由精神の勃興時代である。同時に因襲打破の時代である。その生命とするところは獨創と革新とにあつた。而してこの文化運動は多く中流階級の人々の手に成つた。國學に於ける下河邊長流、釋契沖はその尤なる者であつた。時に水戸光圀は修史に志があり、彰考館を開いて「大日本史」の撰述に手を染めたが、併せて古典研究に

下河邊長流  
契沖

萬葉集代匠記

和字正濫抄

荷田春滿

戸田茂睡  
梨本集

伊藤仁齋

心を潜め、長流に囑して萬葉集に註せしめた。長流歿するに及んで、契沖がこれを大成した。「萬葉集代匠記」はこれである。その研究態度は古註に類はされず、すべて本文に據つて考勸したもので、近世の國學は此書によつて開眼されたと謂つてよい。猶、契沖には「和字正濫抄」等多くの著作があり、學界に於ける偉大なる存在であつた。やゝ遅れて荷田春滿出て、儒佛を脱離したわが國體と神道とを明らかにせんとした。和歌は二條の流風猶衰へず、武者小路實陰、僧似雲などを輩出したが、この堂上歌壇に對して革新の炬火を投じたのが長流、契沖であつた。しかし最も堂々たる歌論は戸田茂睡の「梨本集」に見られる。猶歌文の方面では井上通女、祇園の梶子などの才媛があつた。

儒學にあつても亦自由討究の聲高く、伊藤仁齋は宋儒の註脚



東涯  
荻生徂徠

を排して經傳の本文研究を主張し、その子東涯は父の説を奉じ宏博の識を以つて鳴つた。これを古學と云ふ。荻生徂徠は古文古語を究めて經書に就くべきを悟り、古文辭學を唱へたが、彼の業績はむしろ護園派の詩文の上にあつた。文藝としての近世漢詩文はここに發生した。太宰春台、服部南郭はその逸材である。徂徠門に對立して木下順庵の木門があつた。學はよろしく一派に拘泥せずして廣く亘り、自己の識見によつて取捨すべしと説破した。新井白石はこの門下である。「藩翰譜」「讀史餘論」折りたく柴の記を初め、詩文に語學にその博識宏才は洵に一代の選で、近世文化史上の偉人と謂つてよい。猶木門には室鳩巢、雨森芳洲、祇園南海等、多士濟々であつた。

文藝の中心をなす小説を見るに假名草子から浮世草子に進展した。浮世とは現代と云ふ意味で、當世の寫實である。井原

木下順庵

新井白石  
藩翰譜

西鶴井原

日本永代藏

西鶴は斯界の巨匠として幾多の名作を出した。「武家義理物語」「日本永代藏」「懷硯」などはその一例である。鋭利な省察と奇警な筆致とを以て、人間生活の諸相を活々と寫し、内容形式共に創始的で、小説界に一時期を劃した。續いて北條團水、西澤一風、青木鷺水等があらはれ、事實に取材したもの、教訓を委ねたもの、また怪異奇聞を語るものなど、小説の分野を擴大したが、享保年間に到つて江島其磧は氣質物なる一形態を創めた。氣質物の主眼はある標域のもとに、多趣多様の人物を描き、そこに時代の人の姿を寫し取らうとしたのである。「世間子息氣質」「世間娘容氣」等はこれである。其磧の作は京の八文字屋自笑の手で出版されたので、一般に「八文字屋本」と呼んでゐる。其磧の後に多田南嶺などがあつたが、多く云ふに足りない。

淨瑠璃は語手本位の古淨瑠璃から解放されて、作家の重視せ

江島其磧

世間子息氣質



近松門左衛門

らるゝ時代となつた。元祿期に活躍した近松門左衛門が竹本筑後椽(義太夫)と提携したのは貞享二年である。この二大天才は、當時急激に發達した三絃の旋律と、人形遣ひの巧緻とによつて、大衆をこの新興藝術の陶醉に誘致したのであつた。近松の作は百三十篇に及ぶが、歴史の假面の下に事件本位の作爲を把る『時代物』と、當時の巷説に取材して人物本位に脚色せる『世話物』とに二分される。前者では『曾我會稽山』『國性爺合戦』を、後者では『天の網島』『冥途飛脚』『女殺油地獄』などを傑作とする。殊に世話物の主題とするところは、人情と義理との葛藤で、この桎梏に悩みつゝ、遂に死の悦樂を擇ぶに終る。無智ではあるが、純一な感情に生くる弱者の群の採つた、唯一の道はこれであつた。平安朝のやうな情念偏重に溺れるのでなく、江戸末期のやうに享樂追求に墮するのでもなく、一方確立しかけた道念に引づられつ

國性爺合戦  
天網島



近松門左衛門肖像と國性爺合戦

國性爺合戦 作者近松門左衛門  
 天の網島 冥途飛脚 女殺油地獄  
 曾我會稽山 國性爺合戦  
 竹本筑後椽 義太夫  
 貞享二年  
 近松門左衛門



竹田出雲

つ、他方には動き易い情の搖ぎを如何ともし得なかつた、時代の一面がこゝに反映してゐる。

手習鑑  
紀海音

近松歿後の竹本座の作者には竹田出雲・文耕堂がゐたが、この頃には、二三の作者が分擔して、一篇を組立てると云ふ所謂合作が多く、變幻の妙はあつたが、統整を缺き、徒らに民衆の喝采を博したのみである。出雲の「菅原傳授手習鑑」義經千本櫻は人口に膾炙してゐる。近松と時を同うして豊竹座に紀海音がゐた。

近松半二

その作に「八百屋お七歌祭文」「油屋お染袂白絞」等がある。並木宗輔もこの座の作者として名があつた。しかし淨瑠璃は漸く世の倦怠を招き、剩へ勃興し來つた歌舞伎劇の發展に壓倒されて、享保を頂點として衰頽の悲運に向つた。近松半二はこの時、本朝二十四孝「關取千兩幟」などの佳作を出したが、衰運を挽回する能はず、全く轉落の餘義なきに至つた。



上方藝苑の燎亂時代で、革新から大成への歩武のもとに力強い  
足跡を印した燦かしい時期であつた。

### 三 江戸前期

桃園天皇——光格天皇(寶曆から寛政頃まで約五十年—西曆十八世紀後半)

元文以降、文化の中心は漸次江戸に遷る機運に向つてゐた。  
契沖・春満によつて鼓吹せられた國學に於ける復古的精神は賀  
茂眞淵に至つて飛躍した。眞淵が國學の根本思想は古道の闡  
明にある。儒佛の影響をうけない以前の、眞實な日本の姿に復  
歸すること、即ち固有の日本精神の宣揚を所期するに在つた。  
眞淵の代表作「萬葉考」・「冠辭考」は、彼が古道研究の一着手として、  
まづ此方面に立脚地を置いたのである。彼が和歌を注するの  
も、歌の解釋そのものでなく、そこに日本思想の根源を探らんが

賀茂眞淵

萬葉考  
冠辭考

本居宣長自畫自讃の肖像





ためであつた。彼の學風と主張とは「五意考」「文意語意國意歌意」書意に明らかである。眞淵の學は本居宣長によつて繼承された。「古事記傳」をその主著とする。古事記の解釋であるのは云ふまでもないか、これによつて眞正な日本精神を檢討せんとした。而してこゝに大和民族の至純なる心靈の美しさを發見した。唯、尙古的精神からそれを宗教化した點に嫌りないものがあるけれど、透徹した思索と明晰な推理と、加ふるに精緻を極めた語學的討究とに、絶大の價値を把握してゐる。その他、物語の本質を攻究した「玉の小櫛」、外來思想排斥の「直毘靈」、注釋の「歷朝詔詞解」等、その著作は頗る多い。眞淵門即ち縣居門には猶荒木田久老・内山眞龍などの人才を出したが、眞淵その人が學者として秀拔であると共に創作家としての天分にも恵まれてゐた。従つて歌文の士がその傘下から多く輩出したのである。



田安宗武  
加藤千蔭  
村田春海

小澤蘆庵  
六帖詠草

和歌の上では眞淵は萬葉集を宗としたが、その初期には古今新古今を折衷した歌調を詠んだ。故に彼の門流には萬葉派、江戸派、古今新古今折衷、新古今派の三つがある。萬葉派には揖取魚彦、田安宗武あり、や、古今調を加へたものに加藤美樹がゐた。江戸派の首領を加藤千蔭、村田春海とする。千蔭の「朮が花」は歌に秀れ、春海の「琴後集」は文に優り、共に近世歌文の精粹である。新古今派は鈴屋門の宣長を中心とするが、この派の人々の本領は創作の方面にはなかつた。猶眞淵門には女流作家多く、倭文子、筑波子よの子を世に縣門の三才女と稱した。眞淵の流風以外にあつて歌界に雄視する一派を見る。たゞごと歌の主唱者小澤蘆庵は自然素朴な歌風で清新を以て鳴つた。「六帖詠草」はその歌集である。その交友上田秋成、伴蒿蹊の名も逸してはならない。この外、學界の人、谷川士清、富士谷成章、

塙保巳一はそれらの業績を擧げた。

谷口蕪村  
蕪村七部集  
几董・召波

横井也有  
鶉衣

俳諧は一旦洒落と俗談とに墮在したが、それを「詩」の領域にまで引上げたのが天明期であつた。先驅者炭太祇の後をうけたのが谷口蕪村である。色彩の強い印象の鮮やかな句柄を特色とした。芭蕉の幽寂に對してこれは婉麗であつた。歴史的聯想美と繪畫的寫生美とは蕪村の開拓した獨自の境地で、豊潤明麗な客觀詩は蕉風の深さには缺けたが、自ら成る廣さに展開した。隨想に「新花摘」があり、俳諧に「蕪村七部集」がある。門下の俊毫には高井几董、黒柳召波などがゐた。當時、同じく革新の氣運に乗じたものに大島蓼太があり、や、遅れて三浦樗良、加藤曉台、高桑闌更が出た。世間的に知られた加賀千代もこの頃の人である。また、俳文「鶉衣」にその奇才、飄逸を謳はれる横井也有も亦當代の俊雋であつた。



次に小説界を顧るに、江戸では前期の貞享の頃に赤本があらはれ、黒本に變じ、寶曆期になつて青本となつた。いづれも表紙の色からの名稱で、内容は「お子供衆合點か」と云ふ程度のものであつた。たゞ青本には一寸した趣向があつて、豪傑談・淨瑠璃の荒筋を誌したのもあつたが、安永期になつて黄表紙となつた。これは洒落滑稽を材料として社會諷刺にまで進んだが遂に官權の忌諱に觸れ、寛政期になつては仇討物に一變した。かくて書冊の體裁も紙數の増加と共に合綴となり、その名稱も合巻と呼ばれて、名實共に黄表紙から離れて行つた。黄表紙と並んで行はれたものに洒落本がある。輕妙な筆致で庶民生活の一面を寫實したもので、山東京傳がその名手と稱せられたが、風教上よろしからずとて禁制に會ひ、他の形態、滑稽本・人情本に變化しつゝ、次期に移つた。

山東京傳

太田南畝

風來山人

世間を茶化し生活を冷笑する遊戲的態度は黄表紙・洒落本と共に狂歌・川柳にも存在する。狂歌は夙に延寶の頃半井卜養があり、元祿に鯛屋貞柳がゐたが、天明期に及んでは唐衣橘洲・元柰網・朱樂管江・手柄岡持等多くの才人が輩出した。この間にあつて才華煥發のよく斯界を統帥したものは四方赤良で、蜀山人・太田南畝その人とする。狂歌集、自撰百首、狂文集、四方のあかなど著作は頗る多い。狂文にあつて最も放膽奇矯なるは風來山人であつた。それは曠才世に容れられず、鬱勃の氣を文筆に洩らした平賀源内の筆名である。

川柳は前句附から出た。輕快な機智の閃めきと奇警な觀察の鋭さを生命とする。前句附の前句を除いても、一句として獨立の意味ある形式のものが川柳(五・七・五の形)である。點者であつた柄井川柳の盛名が、この形式の詩の名稱を生んだのであつ

柄井川柳



柳

た。川柳の撰「柳樽」はその在世中に二十四篇を出した。社會相に辛辣な批判を下し、人間性に深刻な省察を投げかける所に、人生風俗詩としての價値が存する。

當代文化の中心は、既述の如く江戸に移つたが、それと共に藝苑の分野も擴大され、歌俳の如きは京阪にその復活の光を見、學藝も亦地方的にその重心が認められるのである。

#### 四 江戸後期

光格天皇——孝明天皇(享和から慶應まで約八十年——西曆十九世紀前半)

江戸後期は近世末期に當り、その中心は化政度の豪華時代に存在する。

伴信友

國學の主張は鈴屋の門流にあつた。考證學者として細心精緻なる伴信友、古道研究を神道に押進め、世界の精髓としての日

平田篤胤

萬葉集古義  
雅言集覽

本主義を高唱した平田篤胤はその双壁である。他門の人々には高田與清、屋代弘賢、また橘守部、鹿持雅澄、石川雅望がゐた。當代の國學は古道研鑽の範圍を廣汎にし、國文國語に關する論攻はもとより、國史に新開拓を試み、加ふるに資料蒐集は、一面雜學者を生ずると共に考證學風を作り、學界に貢獻し、文藝を刺戟するところが甚大であつた。學界の名著としては雅澄の「萬葉集古義」、雅望の「雅言集覽」などがある。

漢學は前期寛政頃に柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里を出し、門流互に競ひ、詩文いよゝゝ進んだが、所謂「異學の禁」發せられて一時停滯の兆を見せた。けれど幾何もなく復活の氣勢頓に熾り、菅茶山、賴山陽、齋藤拙堂、廣瀨淡窓、同旭莊、梁川星巖等、詩に文に名家續出の盛觀を呈した。

歌壇にあつては蘆庵の系統をうけた香川景樹に依つて統一

香川景樹



桂園一枝

された観がある。彼は「調べ」を和歌の生命とし「歌學提要」「新學異見」の歌論と共に、歌集「桂園一枝」に於てその非凡な才藻を示した。門下には熊谷直好、木下幸文や、遅れて八田知紀がゐた。その他、師傅なくして優秀の歌才を示したものに、僧良寛、平賀元義、井手曙覽、大隈言道があり、女流には野村望東、太田垣蓮月があつた。猶歌文では松平定信の「花月草紙」、清水濱臣の「泊泊舎集」、藤井高尙の「松舎文集」、中島廣足の「檀園文集」等が世に知られてゐる。

小林一茶  
おらが春

俳諧では文化の頃、潤達な作風を持つた安井大江丸と、貧窶と苦惱とに一生活を虐まれた魂の作家小林一茶とがゐた。前者に「俳懺悔」、後者に句集と隨筆「おらが春」とがある。同時代に夏目成美、井上士郎などすぐれた俳人がゐたが、天保期に入るや、舉世滔々として淺薄な想念を平俗な言廻して表現する所謂月並俳諧（作家には梅室蒼虬などに墮落し去つたのである）。



瀧澤馬琴肖像と南總里見八犬傳草稿

南總里見八犬傳第八卷之一

東部 曲亭主人編次

第七十四回 牛を軒下へ懸け、谷田鉄を餅よ  
 再記文田小文を呼喚、那能種、泉牛の交、まめ、鶴、富、ま、り、ゆ、り、七、些、中、  
 駢、く、氣、色、を、列、り、反、り、左、右、の、ま、角、を、懸、と、捕、駐、す、然、と、性、ぬ、楚、牛、の、奮、激、  
 四、蹄、を、踏、入、ま、く、推、倒、え、と、角、へ、小、文、吾、も、赤、一、身、の、力、を、極、め、拵、ま、二、歩、を、寄、退、  
 を、千、四、十、五、の、地、中、も、見、入、り、立、る、如、く、一、鳥、獲、か、奔、牛、の、尾、を、獲、留、め、待、て、足、  
 え、と、和、善、な、傳、言、を、及、縁、有、の、社、觀、を、お、け、れ、初、を、懸、懸、懸、れ、く、群、鳥、を、空、中、の、衆、皆、  
 們、の、亦、這、舞、の、身、を、着、て、再、服、を、法、と、彼、と、と、り、ま、を、抗、足、を、空、中、の、衆、皆、  
 四、下、に、懸、り、め、怖、れ、近、く、我、と、沙、を、呆、々、一、目、成、り、す、り、然、程、小、文、吾、ハ



上田秋成  
雨月物語

建部綾足

山東京傳

曲亭馬琴

通俗文藝の粹たる小説は如何と云ふに讀本が斯界の中樞として高級なる讀書圈を牽引してゐた。讀本の先驅は寛延の頃近路行者の「英草紙」と云はれ、その流風を享けたのが上田秋成の「雨月物語」であつた。これらは遠く怪異小説の系統を引くもので、支那稗史の投影が深い。一方、建部綾足の「本朝水滸傳」の如き章回體長篇の示唆もあつて、こゝに浪漫的傳奇小説の新形態が發生した。山東京傳、曲亭馬琴を斯界の重鎮とする。京傳には「安積沼」「稻妻表紙」を初め數篇がある。構想の奇巧はあるが統整を缺き、中心思想に朦朧たるものがあつた。馬琴の作品は斬然として儕輩を抜き、結構雄大、措辭瑰麗、富瞻な想像力と卓絶した獨創力を以て、幾多の大篇巨作を發表した。たゞその標榜する勸懲主義が餘りに露骨であり、因果觀も亦機械的で、生々した人間が描出されてゐない。こゝに彼の作品全般への批難があ



椿説弓張月  
里見八犬傳

る。けれども毅然として一世を睥睨し、近世思想の核心たる道義を高唱して、理想的時代精神の一端を把握した點は偉觀と謂はざるを得ない。「俊寛僧都島物語」「椿説弓張月」「南總里見八犬傳」等を代表作とする。化政度は馬琴の全盛時代たと共に讀本の全盛期で、作家にしてこの方面に筆を染めない者はなかつた。その中であつて石川雅望の「近江縣物語」などは殊に優れてゐる。合卷は讀本を後蹤するものであるが、當初から婦女相手の大衆的讀物を標榜してゐた。毎頁繪畫を主とする點では黄表紙の流れを汲み、内容の變幻奇矯は歌舞伎劇に交渉を保つてゐた。事件が派手で大袈裟で、自然事象とは頗る縁遠い仕組を持つ所謂草双紙風を作成したのである。柳亭種彦の「修紫田舎源氏」を代表作とし、柳下亭種員、笠亭仙果などゐたが、京傳馬琴にもこの方面の佳作がある。

柳亭種彦  
田舎源氏

式亭三馬  
浮世床  
浮世風呂  
十返舎一九  
膝栗毛

洒落本が二分した事は前に述べたがその一の滑稽本には式亭三馬の「柳髮新話浮世床」「譚話浮世風呂」「四十八癖」があり、十返舎一九には「東海道中膝栗毛」があつて不朽の名を勝ち得た。その後塵を追ふ瀧亭鯉丈、梅亭金鵝の作は既に茶番式で僅かに江戸末期の安逸遊惰の一面を反映してゐるばかりである。その二人の人情本は愈々世紀末的の頹廢生活を下劣な態度で描寫してゐる。世上には爲永春水が名を博したが、たゞ曲山人の「娘節用」の外二三のみを佳作と云へば足る。

終りに脚本界を一瞥しよう。歌舞伎が漸く演劇の形態をとつたのは元祿以後で、當時は作者即役者であつた。然るに明和の頃並木正三が舞台意匠に巧案を凝らしたが、その門下から奈河龜助、並木五瓶が出た。五瓶の「金門五三桐」次で鶴屋南北の「四谷怪談」があらはれ、幕末には河竹黙阿彌によつて任侠を主題と

並木五瓶  
鶴屋南北

河竹黙阿彌



する作品を多く上演した。

狂歌は甚しき流行につれて點者を生じ、狂歌堂鹿都部眞顔と六樹園宿屋飯盛(石川雅望)とが宗匠として盛名を博した。この二派は互に相争つたが、末流はいよゝゝ低下するのみであつた。猶音曲の歌詞として琴唄を初め上方唄・清元・江戸長唄(勸進帳・娘道成寺)歌澤等が存在した。

近世三百年、長い昌平に化育された文藝の花は、その末期文化文政の盛時に至つて馥郁たる芳香を放つたが、天保以降擾亂の世相は、遂に頹廢靡爛の作風を生ずるに至つた。而して高雅にして氣品あるものは地を拂ひ、纔かに悲憤慷慨の叫びを詩文に遣るの外、人心を動かすに足るものもなく、空しく散る落英の寂しさに、來るべき明治の春を俟たねばならなかつた。

## 第五章 最近世文學

### 一 明治時代

(明治年間約四十年—西曆十九世紀後半)

明治維新は日本文化史上の甦生期であつた。鎌倉以降數百年來の封建制度は覆されて皇政の古へに復歸した。西歐の文物は潮の如く流れこんで、長い鎖國の夢を驚かした。新時代はまづ破壊から初まつた。「舊弊」の一語はあらゆる傳統を打破し盡した。これに對して「開化」の言葉が歐洲物質文明を謳歌し、無批判に細大洩らすことなくそれを攝取した。この歐化主義は約二十年間續いた。これを明治時代の第一期とする。

當期の文學は一面江戸文學の繼承期であると共に、西洋文化の影響によつて思想界に大混亂を生じた時代である。何れの



福澤諭吉

中村正直

國民の友  
日本人

假名垣魯文

佳人の奇遇

國、いつの時でも從來と別趣の強大な力が輸入せらるゝや、まづ物質的方面から動搖を初め、それが漸次整理せられつゝ、波動は精神的方面に及び、國民の思想開發となつて遂に新藝術を産出するものである。當時も亦、その風潮にもれず、新文學の胎生時代であつた。福澤諭吉の唯物的思想は最もよく當代に適應したが、これに對して中村正直の唯心的傾向は一層深く時代を指導せんとした。新聞雜誌の發達は一般文化の向上に裨益する所多く、舊文明から全く脱し得ない福地櫻痴・成島柳北は、よく民衆の喝采を得たが、徳富蘇峰の「國民の友」三宅雪嶺の「日本人」は時代の先覺たる新彩を見せた。小説では假名垣魯文が新舊の間を彷徨して世評を博したが、それよりも翻譯方面の刺戟により特に英國小説の影響甚しく政治小説の一时的流行を見、東海散士の「佳人の奇遇」末廣鐵腸の「雪中梅」などの創作を生んだ。和歌



坪内逍遙胸像



夏目漱石小照



は桂園派の流れを享けた高崎正風が宮中御歌所にあつて勢力を張つたが、新時代の歌の出現は次期を俟たねばならなかつた。また、新しく生誕した所謂新體詩はわが國在來の長歌と西歐の詩とを渾和したもので、十八年外山、山等ケの「新體詩抄」となつて現はれたが、一般文運に比べて時代尙早の感があり、その隆昌は猶十年の後にあつた。

明治時代第二期は新文學發生期である。歐化主義の反動として國粹主義の昂まり來つた時代である。殊に日清戰爭頃の國民覺醒は一面復古的思潮を使喚し、元祿文學の唱導さへ見たが當時に最も赫耀たる光を放つたものは文藝評論及び小説であつた。森鷗外と坪内逍遙とは批評界の双壁として、文壇の指導誘掖に當り、文藝の隆々たる發達向上はその努力に負ふ所が多い。齋藤綠雨また辛辣なる評言を恣にした。逍遙は十八年



小説神髓

二葉亭

浮雲

尾崎紅葉

多情多恨

幸田露伴

五重塔

桐一葉

北村透谷

落合直文

正岡子規

「小説神髓」を公にして寫實の大道を示すや、これに應じて長谷川二葉亭の「浮雲」があらはれた。次で尾崎紅葉、幸田露伴出て、前者は現實的傾向を主として、心の闇「多情多恨」等を著はし、後者は理想的傾向を標榜して「風流佛」「五重塔」その他を作つた。この外、山田美妙も名があつた。戯曲は所謂芝居道の因襲久しきため、演劇改良の聲も空しく、鷗外は泰西劇を紹介し、逍遙は「桐一葉」を出したが、時代は未だこれら新聲を容るゝに至らなかつた。

詩界には鷗外等の譯詩や北村透谷を中心とする文學界諸詩人の作品を見たが、むしろ擬古的抒情詩「武島羽衣」「鹽井雨江」が全盛であつた。和歌は「淺香社」を率ゆる落合直文がまづ革新の聲をあげ、その門下與謝野鐵幹は男子の歌を主張し、また正岡子規は萬葉調を提唱した。俳句は同じく子規の更新によつて幕末の賭博俳諧も再び文學の域に引上げられ、その門流「日本派」は雜誌「ほととぎす」に依つて俳壇を風靡するに至つた。「寒山落木」は彼の句集である。更に翻譯には二葉亭の露文學、鷗外の獨文學、森田思軒の佛文學の紹介を初め、内田魯庵等常にわが創作界を刺戟感化すること多大であつた。

明治第三期は日清戦後から日露戦争前後に至る約十年間で、前期の革新思潮の後をうけた浪漫主義昂揚の時代である。現實的傾向が行詰つて懷疑的風潮を生じ、個人の意義、天才の價値などを闡明して、その威力を謳歌し憧憬せんとする浪漫的傾向が著しく昂まつて來た。評壇の高山樗牛はその急先鋒で常に新しい問題を提げて縦横の論陣を張つた。その他の論客には田岡嶺雲、大町桂月があつた。思想界では清澤滿之の敬虔な報謝の生活や、綱島梁川の宗教的體驗が力強く時代に反映した。

小説には紅露二家を初め、「うら表」の作者川上眉山、「高野聖」の作

高山樗牛



樋口一葉  
たけくらべ

者泉鏡花などが輩出したが、女流作家樋口一葉は女性心理の描寫に特技を有し、たけくらべ等の佳作を残した。

島崎藤村  
若菜集

詩は抒情詩高潮時代で島崎藤村の「若菜集」は優婉典雅、若き日の淡愁とも稱すべき情念を湛へ、土井晚翠の「天地有情」は冥想的

土井晚翠

薄田泣菫

詩情を遣るに壯麗の辭を以てした。續いて薄田泣菫あらはれ、叙事詩勃興期に至つて神話傳説の幻想化に特色を發揮した。

「二十五絃」を主著とする。

奥野晶子

和歌は鐵幹の率ゐる「新詩社」の雜誌「明星」が當代浪漫的風潮を最もよく代表し、歌集「みだれ髪」「舞姫」などの作者晶子を中心とする。直文門には金子薫園・尾上柴舟が出て、「竹柏會」を主宰する佐

佐佐木信綱

佐木信綱は歌學と作歌との兩面に於て偉大なる業績を示してゐる。

河東碧梧桐

俳句は子規門葉から河東碧梧桐・高濱虚子及び内藤鳴雪など

現はれ、日本派の勢力頓に加つた。寫生文なる輕快な新文章も子規の主唱するところ、坂本四方太等がゐたが、後、小説界に大なる示唆を與へた。その他「秋聲會」から角田竹冷、「筑波會」から沼波瓊音が出た。

上田敏

翻譯は依然として二葉亭鷗外の活躍を見たが、歐洲文藝の新思潮に絶えず留意してこれを紹介し、常に文壇の指導に當つた者に上田柳村(敏)があり、また平田秃木・馬場孤蝶がゐた。

上田萬年  
芳賀矢一

猶、祖國文學を對象とする學的方面では、江戸時代に於ける國學の末流がむしろ宗教化した後をうけ、こゝに時代に適應した新研究が創められた。國語學の上田萬年、國文學の芳賀矢一を斯界の陳吳とし、次で藤岡作太郎があらはれたが、その後の研鑽いよゝゝ精緻に入り、眞に多士濟々たる感がある。



## 二 大正時代

明治末期から昭和初頭まで約二十年間

大正時代は明治時代の繼承期である。むしろ駸々として發展を續けた躍進の時代と呼ぶのが適切である。しかも、その間には日露戦役あり、世界騒亂あり、思想界の動搖この時より甚しきはなかつた。この氣運に乗じて國威の發揚と民力の充實とを把握し得た近代日本は、この社會的變動に伴ふ苦惱も亦その半面には深いものがあつた。

かゝる時代の姿は、時の文學に反映せずには措かないものである。こゝに於て從來の夢幻的な浪漫的風潮は泡沫の如く消えて、灰色なす現實の重壓が犇々と迫つた。人生の陰慘な影のみが濃く映つた。それは自然主義傾向の醜い暗い人の世の姿であつた。しかし人間の住む世はかゝる苦しみの世界ばかりではない。宏博な「愛」と慈しみとは人生の行路に「光」と「明るさ」を持ち來す。自然主義の後に、新理想主義が展開したのはその實相の反照であつた。大正前後の文學の過程はこの道を述べけてゐる。

評壇はまづ泰西の物質的的人生觀に共鳴して、文學の科學化を唱へた。即ち從來の「美」の文藝を排して「眞」の文藝を提示した。「眞」を寫實せんがためには敢て人間の醜惡なる方面をも辭せない。むしろ醜惡なる所に眞實の人生があると強調した。論客には島村抱月、長谷川天溪あり、作家には徳田秋聲、正宗白鳥、岩野泡鳴あり、論と作とに活躍したものに田山花袋があつた。詩人藤村もこの時小説に轉じたがその「破戒」「春」は一般の自然主義作品に比べて廣汎な處がある。國木田獨歩は平凡人の平凡生活

島村抱月

田山花袋

破戒

國木田獨歩



獨歩集

を標榜してむしろその半面に神秘的傾向を持つてゐた。短篇集「運命」「獨歩集」、自然觀照の「武藏野」を主著とする。而してこの自然主義的風潮は當期の小説を中心として、その他の多方面に亘つて氾濫したのである。

高瀬舟

この思潮に對抗するものは鷗外であつた。人生の傍觀者と號して創作に筆をとり、或は現代世相を寫し、或は史實に材を求めて人間性を描いた。「青年」「高瀬舟」「山莊太夫」などはその一例である。また精神的享樂主義を提唱した上田敏の「うづまき」「江戸追憶」の永井荷風、耽美派とも云ふべき谷崎潤一郎の諸作がある。同時に、子規の寫生文から發足した淡雅の詩境を行く高濱虛子、伊藤左千夫があつたが、長塚節の「土」に至つて郷土藝術の新境地に展開した。この間にあつて蒼然として時代を睥睨するものを夏目漱石とする。漱石は初め俳人として知られ、寫生文式の

長塚節

夏目漱石

吾輩は猫である

心

小説「吾輩は猫である」を草し、次で幽韻縹渺な「草枕」や、道義の色彩濃き「虞美人草」に非自然主義を標榜したが、漸次人間心象の深味を解剖して「それから」「心」「明暗」等の長篇を發表した。その門下に幾多の作家批評家を出したが、その作風なり、態度なりは自ら異つてゐる。評家阿部次郎・小宮豊隆はこの門下である。

漱石の思想に感化されて、人道主義を唱へたのが雑誌「白樺」の作家で、武者小路實篤等を中心とする。その他愛の文學の宣傳者有島武郎があり、里見弴、志賀直哉がある。明澄なる詩品を残した芥川龍之介と共に、山本有三、菊池寛、久米正雄の名も逸してはなるまい。

戯曲では中村吉藏、岡本綺堂が出たが、劇の民衆化に精進した逍遙と、歐洲新劇の移植に努力した鷗外との業績は大きい。

詩は革新期に入り、近代詩の提撕はこゝに形式打破の運動と



海潮音

蒲原有明  
北原白秋

なつて現はれた。それよりさき、上田敏の譯詩集「海潮音」は詩壇に投げた炬火で、影響するところ頗る大きく、その象徴詩方面は蒲原有明の「春鳥集」にあらはれ、一方民謡風諧調は北原白秋の「思ひ出」によつて昂揚された。かくして、多くの詩論と習作とを経過しつゝ、日常生活の詩化から自由詩形の擡頭となり、漸次自由詩が一般的型式と認められ、詩界を風靡し去つたのである。

石川啄木

和歌は痛ましい生活記録の歌集「悲しき玩具」「握の砂」の作者石川啄木、自然と旅の歌人若山牧水を出したが、一方には子規の主張した萬葉調の復興となり、雑誌「アララギ」の島木赤彦・齋藤茂吉の名が喧傳されてゐる。その他、前期以來の信綱・柴舟・薰園はそれら、一方の覇者として知られてゐる。俳句は碧梧桐の提唱した新傾向は十七字形破壊の運動であつたが、むしろ一種の新しい詩と呼ぶにふさはしい。同じ流から出て、更に一派を開いたものに萩原井泉水あり、俳論家としては大須賀乙字がゐた。

萩原井泉水

猶こゝに附記すべきは明治以後、情趣ある文章家に關する一面である。詩人・小説家・評論家にこの方面の達人がある事は云ふまでもないが、その他には、さきに大町桂月・徳富蘆花あり、近くに寺田寅彦・杉村楚人冠・吉江孤雁等がある。

思ふに明治大正の文學は、内容に於ても形式に於ても異常なる展開を遂げた。江戸時代に庶民の間に浸透し横に擴まつた文學圏は、更に明治時代に入つて深く掘り下げられた。貴族から窮民まで、その對象とする世界は極めて廣汎である。これを心理的に人生的に分析し解剖し、また現實から幻想まで、筆端の及ぶ所、想像の浮ぶ限り、すべてに抵觸して餘蘊ない。洵に國文



學史上空前の盛觀である。大正昭和に亘る現代文學は記して  
 詳にしない憾みはあるが、残された「明日の文學」として、しばらく  
 傍觀し、われわれはまづ過去の文學を回顧して、そこに現はれた  
 われわれの祖先の精神生活の偽りない姿を凝視し、以て自己内  
 省の資に供したいと思ふものである。

終

中等日本文學史



昭和十二年六月二十日 印刷  
 昭和十二年十一月三十日 發行  
 昭和十二年十二月一日 修正發行

著者	鈴木敏也
發行者	中村時之助 東京市牛込區神田町一七四番地
印刷者	松岡虎王 東京市神田區錦町三ノ十一番地
印刷所	三鐘印刷株式會社 東京市神田區錦町三ノ十一番地

定價三十八錢

發賣所

東京市牛込區  
神田町百七十四番地

中文館書店

電話牛込三三二五番  
振替東京三八四二七番



40

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----



